

『禪林宝訓』諸版の系統

椎 名 宏 雄

一

大正大藏經第四八卷の卷末に近く、『禪林宝訓』四卷が収録されている。目次に「明・浄善重集」とあるのは誤りで、浄善による本書の重集は南宋期であった。

いずれのテキストにも付せられている、浄善の序文によれば、本書はもと大慧宗杲と竹庵士珪とが江西の雲門庵で編集し、これを東呉の沙門浄善が淳熙年間（一一七四～一一八九）に大幅に増補再編したものである。内容的には、宋代先徳の語録や伝記中から参禅修道者の訓誡策励となるべき語句・機縁約三百篇の抄出編集であり、各篇ごとに出拠を明示するという特長がみられる。

こうした本書の性格により、宋代以降の禅門では同じような傾向の『緇門警訓』などとともにすこぶる愛用され、時代ごとに版をかさねている。特に明代以降のすべての大藏經に入蔵してからは、数ある禅書中でも重要な地位におかれてい

る。

しかし、本書は多くの諸版により、書名・巻数・篇数などを異にするものがあり、文献史的にテキストの総合的な検討が必要である。まず、次頁に本書の諸版を一覧しておこう。ただし、近年の諸大藏經の再印本などは省略した。

二

表示した二二版のうち、所在や伝存の知られるのは一七版である。筆者はこれらの中で⑨の明刻本をのぞく一六版を閲覧・調査しているが、特に注目すべきは②⑤⑧⑩⑫⑭⑯の諸版である。以下、これらのテキストを中心として、各版の書誌的特徴を紹介しよう。

まず②の五山版Aは、すでに各所蔵機関の解題や川瀬一馬『五山版の研究』などで紹介されているが、無学祖元の法嗣である古倫慧文の募縁により、弘安一〇年（二二八七）に建長寺相統庵から刊行されたものである。古倫の刊語につづく

No.	假称	刊年	西曆	卷册	刊行地等	所在
①	宋版	淳熙9序	一一八二	(二卷)	淨善編刻	
②	五山版A	弘安10	一二八七	上下二卷二册	建長寺正統庵	成實、天理
③	元版	至元31	一二九四	(二卷)	真州長蘆寺	
④	五山版B	(南北朝)	一三三二	上下二卷一册	覆弘安十年本	国会、東洋、松ヶ岡
⑤	高麗版	宣光8	一三七八	二卷二册	忠州青龜寺	東洋、北京函、ソウル大、等
⑥	増添本	(明初頃)		(二卷)		
⑦	正統本	正統8	一四四三	上下二卷二册	嘉興三塔寺	内閣、成實
⑧	嘉靖本	嘉靖21	一五四二	二卷二册	金剛山表訓寺	天理
⑨	明刻本	(明代)		二卷二册		北京函
⑩	円經本	嘉靖27	一五四八	二卷二册	円經重刊	成實
⑪	北藏本	万曆12	一五八四	四卷四帖	統入藏部〔忝〕七〇	(未確認)
⑫	嘉興藏本	〃 18	一五九〇	〃 四册	五台山妙徳菴	(多數)
⑬	南藏本	〃 34	一六〇六	〃 四帖	統入藏部〔忝〕七〇	快友寺
⑭	寛永本	寛永8	一六三一	上下二卷二册	京都、時心堂	駒大、松ヶ岡
⑮	崇禎本	崇禎17	一六四四	(四卷)	如祐序刊	
⑯	黄檗藏本	寛文9	一六六九	四卷四帖	京都、万福寺〔忝〕七〇	(多數)
⑰	頭書本	延宝9	一六八一	上下二卷一册	小嶋助左衛門等	駒大
⑱	註拾遺本	享保6	一七二二	〃 〃	京都、柳枝軒	駒大
⑲	竜藏本	雍正13	一七三五	四卷四帖	北京官版〔九〕七〇	(多數)
⑳	縮藏本	乾隆3	一七三八	〃 〃	北京官版〔九〕七〇	騰一〇
㉑	冠註本	明治17	一八八四	〃	東京、弘経書院	駒大
㉒	正藏本	昭和3	一九二八	上下二卷一册	愛知、矢野平兵衛	駒大
㉓	正藏本	昭和3	一九二八	四卷	東京、大藏経刊行会	四八

浄善の原序、勅縁者程彦弼以下五名の連名、安慶府太平興国禅寺住持嗣祖比丘妙機校証、などの刻記は、ともに浄善が刊行した宋版のそれを忠実に印刷したものであろう。内題の「禪門宝訓集」、上下二巻の調巻、全二七八篇の篇数なども、宋版当時の形態を示す貴重なテキストであり、のちの④や⑬の底本・祖本的な地位にあることを知らしめるものである。

⑤の高麗版については、大屋徳城氏による京城大本、稻葉岩吉氏による同氏所蔵本の各簡単な紹介があるが、東洋文庫本については未紹介のようである。該書の調巻や篇数は前述の②五山版Aと全同であるが、巻末には(一)永中の重刊語、(二)原刊記、(三)原校証者銘、(四)尤表の敬跋、(五)幻庵混修の跋、(六)募縁・助縁者銘、(七)刊記が刻されている。このうち、(一)は前述の②のものと同じであるが、他の諸記は本版独自、または本版を最古とする。また、内題は「禪林宝訓」である。

(一)の永中の重刊語と(二)の原刊記は、つぎのとおりである。

是帙、刊行久矣。板留松源和尚塔院。一夕災、板亦隨燬。識者惻焉、今募衆縁、重新録梓、以寿其伝。使見聞之士、如与諸大老、周旋於千載之上、甚適所願矣。甲午中秋、呉門比丘永中謹識。

板留長蘆禅寺印行

永中は僧伝等には不載であるが、『緇門警訓』や『高峰和尚禅要』をも刊行した人であり、中峰明本の門弟である。甲午は元の至元三十一年(一二九四)に相当するから、この年に

本書を真州長蘆寺から重刊したのであろう。そしてその祖本は、松源和尚塔院の印板とされるから、松源崇岳(一一三二—一二〇二)が入塔された杭州靈隠寺での刊行本とみてよい。それは浄善の初刻本か、またはこれを承ける未知の宋版かか、いずれかであったと思われる。

次に(四)の尤表による敬跋とは、内題を「二絶敬跋天池善老宝訓集後」とする七言絶句二首の賛であり、壬寅重陽の年記をもつ行書体である。尤表(一一二七—一二九四)は『遂書堂書目』で知られる人であり、壬寅は淳熙九年である。したがって、この敬跋は、浄善による本書の初刻が淳熙九年(一一八二)九月以降であること、本書の名称が「禪門宝訓集」とも称したとみられること、浄善は「天池」という寺名か道号が冠せられる人であること、などを知らしめる貴重な遺文である。

(四)の跋は、左記のとおりである。

右宝訓者、宋之高僧妙喜・竹菴、愍諸末学、多求声名、不修道徳、共集尊宿之高談、叢林之遺訓、可以警衆者、析為二巻、目之曰禪林宝訓。兩街了菴行齊公得之一部、歎未曾有、囑門人尚偉禅者、募縁彫板、広令流布。幻菴為題數語于末。

宣光八年戊午二月書于宴晦菴

さらに、(七)の刊記は「留板 忠州 青竜禅寺」とある。以上により、この高麗版は永中が長蘆寺で重刊した元版を、宣

光八年（一三七八）に高麗末期の禅匠、幻庵混修（二三〇～一三九三）の跋をえて、忠州青竜寺で開版した半島での初刊本であった。

⑦の明版は、各巻末に音切を置き、巻末に正統八年（二四四三）に呉興大海による重刊後序と「板存嘉興三塔寺大乘堂流通」の刊記がある。注目すべきは、従前本に比して本文に一二篇の増添がなされ、大正藏経本と同じ全一九〇篇となっている。これは、⑦を承ける嘉靖二十一年（一五四二）に金剛山表訓寺刊行の朝鮮版⑧も同じであって、おそらくは⑦の底本がすでに増添されていたのであろう。ちなみに、呉興大海は大明南藏中に多くの再編禅籍を初蔵させた定巖浄戒の法嗣であり、本書も浄戒の住した鐘山靈谷寺で得たことを後序で述べているから、増添者は浄戒に擬せられるかもしれぬ。

⑩の成實堂所蔵本は、明玄の跋と円経の重刊記などから、やはり⑦を承ける一本であるが、巻末に尤表の敬跋を刻しているのは、③の元版によったものであろうか。また、⑨は『北京図書館古籍善本書目』子部に、明刻本として著録される一本である。⑦⑧⑩のいずれとも版式を異にし、所在の知られぬ⑥である可能性もあるが、いまは別版としておく。

明版大藏経の入蔵本⑪⑫⑬については、明末に北蔵の統蔵部分に本書が入蔵し、これが南蔵の統蔵部分にも編入された。ところが一方、⑭の嘉興蔵本も万曆一八年（一五九〇）

という明末の刊記がみられるから、これら三種の入蔵本はさしたる隔りもなく、次々と入蔵したのであろう。

⑪は目下みられないが、『閲蔵知津』巻四三の解題、北蔵本を承けるといふ⑬竜蔵本の内容によって知られる。また、⑬の南蔵本も快友寺の蔵経目録と部分写真による検討ではあるが、これら南北両蔵本はともに⑭の嘉興蔵本と同内容の四巻本であり、その調卷が北蔵本にはじまることを示唆している。

その他、⑯の黄檗蔵本、わが近代の縮蔵本や正蔵本は、いずれも嘉興蔵本と同じ体裁内容であるのに対し、むしろ近世の⑭寛永本や⑰頭書本は、前掲の②五山版Aの系統に属することが知られる。

注目すべきは⑱の註拾遺本で、五山版系統になく蔵経本系統に増補される一二篇の注疏のみならず、両系統を代表する二本（⑰頭書本と⑱黄檗蔵本か）による本文の校注を付し、巻首には崇禎一七年（一六四四）の如祐による序をおいている。これにより、崇禎一七七〇ごろにも閩・粵地方で本書が刊行されたことを知る。

三

以上、諸版について重点的な紹介をしたが、書名・調卷・篇数の相違によって、完全に二つの系統のあることが明らか



